

# 羣書類從

二百四十四

庫文閣内			和 書
美 函 六	六 六 六	一 八 六 九 〇	
架	冊	號	

庫文閣内			和 書
二 五 二 一	六 六 六	一 八 六 九 〇	
架	冊	號	

内閣文庫		
番號	和	18690
冊數	666(311)	
函號	215	3



群小の類は、  
...

...

...

檢校保心一集

...

群書類従巻第百卅四

浅草文庫



祭主輔親卿集

和歌部九十九 家集十七

檢校保巳一集

文之也れ才学と見えん文章をととに家乃集と  
かのもて世よつと人あり是を人しきる人のくれを  
志す一経るは多ううかろゆへり寝殿乃草は  
を教くくよあはれ和哥れ句しきる人のハ知り  
くそ一為あはれ志しと又と一なる人そ  
和らるる人のくきり孫よりあはるるのくしと檢れ

と色とさされよのふとれ出雲のらふわられ娘屋門  
 僧正此難波津よむひひーより三十一字と詠ふふ  
 ちー海邊に其後さ海く乃醉られちーか  
 す但妖艶のあーら花鳥れつひ果接の曉産  
 此夜或離別餞送りよーと或夜位戀慕れなく  
 少先山川野望の所種産の夕とえく友とよ  
 杯樂り乃りて酔ふよれつよくふひひあつ先  
 ころと紫あれとけくーもむむむむむむむ  
 外屏風草子れ寄ーくわくせ竹あをむかす  
 此いよはとすまらむいふふ歩都まーくふされぬく

すー是よよと系さもささめさるにぬと見女祖  
 師のあようけて或くの回草紙歌うふ奈ひひく  
 ちろよちろよひされもむむむむむむむ  
 りてあまーひよあさやうなる紙紙くうん事と  
 ゆめく人の縁さるさまをいふーささうらうてうさ  
 くひれれやれあああああああああああああ  
 うささささささささささささささささささ  
 花れくささささささささささささささささ  
 おや乃家れけりさささささささささささ  
 ささささささささささささささささささ

これより二年の春はさういふ山の露とまゝにさう  
梅花

ゆきくに咲く梅もももさういふ山に  
寫す

萬代のまゝにさういふ山にさういふ  
秀すもなまゝにさういふ山に  
さういふ山にさういふ山に

ちとせにさういふ山にさういふ山に  
さういふ山にさういふ山に  
さういふ山にさういふ山に

此のまゝにさういふ山にさういふ山に

二月に花はさういふ山に

ゆきくにさういふ山にさういふ山に

あゝ一月山はさういふ山に

まゝにさういふ山にさういふ山に

おのゝ山はさういふ山に

さういふ山にさういふ山に

おのゝ山はさういふ山に

あゝおのゝ山はさういふ山に

あゝおのゝ山はさういふ山に

ある人よあはれやあはれそ友のむすしと  
友あはれやあはれそあはれしそあはれの母のあはれ  
う月あはれそあはれしそあはれをあはれそ  
みとそと

あはれのあはれしそあはれしそあはれのあはれ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ

とくんと

あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ

五月なるうきの人

あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ  
あはれしそあはれしそあはれしそあはれしそ







神皇御曆  
あまのつらき  
人かこし  
よるま  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき

あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき

あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき

あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき

あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき

あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき

あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき  
あまのつらき



にやうせうしう十首哥とて花

慶らわのめく春と成るもあふ草木も憐れうひく

寛政の川に流

春浅くすむ山道は深きとてさくさくはる川は言はれ

まろれ

わらわついでうらなれ昔の言はれ今も人の思ひあはれん

春雷

傳はるるまろ雷とてさくさくはる山乃縁をさくさく

宗院大將殿をとお言女とて言あはれせうらり

あはれい

あはれの縁うらなれ昔とてあはれい人の思ひあはれ

中さるる人をもさうらつて人の思ひあはれ

地あはれい

今もあはれい昔とてあはれい人の思ひあはれ

閑院女御をうらなれ一敷あはれい紅梅

の枝よまろつてさくさくはる川に流

人多くさるる梅とてあはれい人の思ひあはれ

二月子日に宗院大將殿の女房をうらな

あはれい

みづうらなれい人の思ひあはれい人の思ひあはれ

三月のうらな花ふり

河津のうらな花ふり山橋のうらな花ふり

麗景殿女御の女房わらわのうらな花ふり

上座のうらな花ふり

うらな花ふり

花ふりうらな花ふり

あやの女房のうらな花ふり

うらな花ふり

うらな花ふり

うらな花ふり

うらな花ふり

うらな花ふり

うらな花ふり

うらな花ふり

うらな花ふり

うらな花ふり

うらな花ふり

うらな花ふり

うらな花ふり

うらな花ふり

うらまの後とていふは橋成のひよはる人世を  
あつ男人のて成ありとつに種ひなを  
先かまひとていふん女つるこやんを  
ひらき

君ひくひくともそのおの娘とていふは  
こ堀川とのほらうしにひれをのりてさう  
能乃かとうに男とていふ女あふく  
よひわし川宮三月あり

ゆ人の敷やをり勝つまの波とていふは  
人の敷よすまひひら比五葉らつて  
は乃松をり人ひらゆらうはり  
八年にありぬらひとていふは

独て後まのの代をかきつるまの  
家よりり人あつらうとていふは  
海文事とりや

花さうぬ者なうませは古れ  
しりし地人のまきんのまき  
うれちふ君成松浦のほ松の千代  
あひ一人あふさうすまは

うへてゆくに波路のうへに  
 あうまぬよめいん  
 せだらもといふには遠くは  
 逢坂の園らあもとも  
 人よあちの道事  
 るの志不れ千ら  
 ちうらる人のむす  
 とらよまき  
 夏あな人のあつた  
 田舎がらわと

いかつとといひ  
 郊よりか移て知すま  
 人よあちの道事  
 久しき何あいな  
 丸じりれきり  
 一はいん  
 花あまの年  
 我者乃らる孫の草



夏乃上野のあやめしりお歌成をまへて  
 五月ぬいしり此月と思ひくともひれおひしり海流  
 のまはあはめ

ひきしりおひしりおひしりおひしりおひしり  
 女取の富つりしりおひしりおひしりおひしり  
 つかしりおひしりおひしりおひしりおひしり  
 さるしりおひしりおひしりおひしりおひしり

我よりしりおひしりおひしりおひしりおひしり  
 あれしりおひしりおひしりおひしりおひしり  
 しりおひしりおひしりおひしりおひしりおひしり

いしりおひしり

我よりしりおひしりおひしりおひしりおひしり  
 つかしりおひしりおひしりおひしりおひしり  
 さるしりおひしりおひしりおひしりおひしり  
 しりおひしりおひしりおひしりおひしりおひしり  
 いしりおひしりおひしりおひしりおひしり

あはれしりおひしりおひしりおひしりおひしり





山より花をゆき

つとより花をゆきらんまはらに花をゆきらん  
かきつる花をゆきらんまはらに花をゆきらん  
かきつる花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

千代をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん

らむ花をゆきらんまはらに花をゆきらん



かきぬり海より望む草薙を知らずはかへりて  
かきぬり海より望む草薙を知らずはかへりて

我者にかきぬり海より望む草薙を知らずはかへりて

まらうとあまをわく時をたがひぬすれいひ

時鳥ぞくしやあまをわく時をたがひぬすれいひ

知りけり人よとんあまをわく時をたがひぬすれいひ

こひよたがひぬすれいひまをわく時をたがひぬすれいひ

なるよりいふ人よとんあまをわく時をたがひぬすれいひ

何れかきぬり海より望む草薙を知らずはかへりて

あー

つらき目も海より望む草薙を知らずはかへりて

とたのきい又い

君がぬ人をよき恋もあらずに世をわく時をたがひぬすれいひ

八月よりあまをわく時をたがひぬすれいひ

とあまをわく時をたがひぬすれいひ

曙よあまをわく時をたがひぬすれいひ

ひしがらひ人のもとにある女のあまをわく時をたがひぬすれいひ

先よぬる城よりあまをわく時をたがひぬすれいひ

とあまをわく時をたがひぬすれいひ

ある人のうらを七日夜人へ寄よし

なほ遠きうそよたひとる若れとらふらつて

かくうへ人の七月六日うらにふもれを

きん枝折あつらへる

秋色も浅き地の色成る公海もあはれ

とありれと流さつたもみらに

まゆこれ枝よとて

去年はあつたぬ糸に人へ

七月うらあれせん

山前よあま

あはのよれ月水よあ

秋のよれ雲霞とあつた月がま

あつた

よにさる庭の風うら

九月うらとにま

ゆ

秋のひま門あはれ

うらう友とら

あまのうら

み人あつた山

十月をきよほりつる人へくらにせらして是  
 なるころをたにせらむとてなごころ  
 川おとひとよあそびもあそびもあそびも  
 ながし目もあそびもあそびもあそびも  
 ねちねちあそびもあそびもあそびも  
 みは山吹のちりも年あそびもあそびも  
 ああああああああああああああああ  
 ながしにひきあそびもあそびも  
 まくしにひきあそびもあそびもあそびも  
 かさふ人のつねにうらむあそびも

宇らきあぬ人の為よよとて意小我もあそびも  
 ああ人なごころあそびもあそびもあそびも  
 逢もあそびもあそびもあそびもあそびも  
 夏夜月あつた人のもとふいふころに  
 とあそびもあそびもあそびもあそびも  
 月あそびもあそびもあそびもあそびも  
 花さうたひ人のりこにさそ花橋のふりま  
 てやろ  
 あらうあそびもあそびもあそびもあそびも



と月には園のいささうやあんとしよ  
すかある園の山れとふれと越て道り秋のよれ  
秋より人づくにあき公たはそ人

別ちれさくにとんあよりとほつあき故の形さふ  
とあましむのい人さき思あふ人

思ふんたりとあがくあはあふ小とく夢うり  
まひとく東りある人のうり

舟より夜をそは新床と後の子をたぬく  
つる人うらにやうかき人あま

煮うり舟うる波よあひかきとや我うる  
人ふいおく好むをなくと成さあまゆに女

福もなりと雲井とるふ別るあまのいぬ花  
とあましけよふい何年あまあまあま

何ふとあまみとるふに福つとあまの福あり  
又やう人あまのいと後又あまを

福をを櫛とあまの濱千鳥のい何とあまのあ  
むいすう日とあまのい人のあまのあ

あまのいや遠うるあまのいあまのい  
と

あまのいあまのいあまのいあまのい  
あまのいあまのいあまのいあまのい





舟がらまゝしとて音なき山彦と名ぬる神の長と書わる  
 人へあまの指とあるとよひくもまはらう小  
 ぢり此城まほしと鳥のうひまらうとくしとてか  
 らまゝよ  
 うひくもあまの指とて知るにわらひとておのふに  
 じり此城まほしと鳥のうひまらうとくしとてか  
 らまゝよ  
 うひくもあまの指とて知るにわらひとておのふに  
 じり此城まほしと鳥のうひまらうとくしとてか  
 らまゝよ

心あへても飛ぶるうみはそかくまわれよ  
 うかかんよひくもまはらう小ぢり此城まほしと鳥のうひまらうとくしとてか  
 らまゝよ  
 うひくもあまの指とて知るにわらひとておのふに  
 じり此城まほしと鳥のうひまらうとくしとてか  
 らまゝよ  
 うひくもあまの指とて知るにわらひとておのふに  
 じり此城まほしと鳥のうひまらうとくしとてか  
 らまゝよ

秋風  
 ある取ら奇合にあの君あしよもはらう  
 夜まじる秋の初を吹くも夜うらまはれえとすも  
 まら





数あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは

世の中れ人なりやうかあはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは

よそを色板のみもあはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは

五月ついでにこれあはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは

雲とくみ

あまのさきく月のあはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは

日頃あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは

山のとれ月なりやうかあはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは  
あはれ申す所のくひの年をきししと物とあはれあは



としかつこの人の斎宮をもちて

あはれみこころにけしきも伊勢はうらひの浦とよみ

ある所の記色もぬの志よ櫻のくふれさるる木れ

下に水なする人の家より女のおとじ一羽あは

花さき木の下み成むすひのまてちよあは後の氣をほく

心うけする人のもとにいさそあはこころいふせき

あはれみかくひやる

とちの里よ女きて夢そながくをゆてかきまは我意

三月のころにたうとれぬ人よこころよ

夏夜ころへたの心を結う暮ゆき雲の色あはこころ

左大臣殿さうひんまへんわうかたこころ

あはれみなる枝よつらうきこころにわうりあは

あはれみこころに

あはれみこころにのこころをねたうらむれさるる

三月廿日よひこころをさうきんまうりてんを女房

よいぬこころ

さうきんまのこころにれさるる春はうらむかきこころ

さうきんま

思ひつらうれ年成志のこころ思ふ後つともあは

あはれみこころにさうきんまのこころあはれみこころに





らる人色あまき山里にきく梅はらりれたる歩ふさうなま  
二月ああふらるに院の子日とすあそつかなるを  
海よとひらんこあうまをひらひとく

雙よとまひひく松のこことい思をれをらよははらん  
あか不もそ二月十日れらる東に花いよあま  
し海とんとあううあうあましはううられる  
人よといあをせく

大るれおの花と咲ぬらん中えも春の梅とよひし  
安富のたりのおほくふふる文所のいとつとあ  
あまそ人歌もみくわとくくみまの三月十日う

まきくつとあましらうとあうさせうらる神の  
かまてらるはえんく

あまにみ庭の櫻はらりけと志めれ神の色うへてあり

右補親集為定々の秀つひあ自あな一字不遠  
令書寫く再佳加校合若也

寛文六年初冬仲旬

右系主補親集雖不番多依筆紙不能授正

卷二百四十四

三十一